第四回 齋藤茂吉短歌文学賞

前登志夫『鳥獣蟲魚』

小澤書店

正賞・茂吉自筆色紙の織画
副賞・賞金百万円

選考委員

委員長 岡野弘彦

委員 川村二郎
島田修二
宮地伸一
安永蕗子

（五十音順）

前登志夫『鳥獣蟲魚』（自選十首）

天上の一枝を折りて土に差す靄ふかきかなわれの國原

森ふかく埋めたりし首いくたびも緑青の雲噴き出づるなり

木木の芽に春の霙のひかるなりああ山鳩の聲ひかるなり

山のまのわれの睡りの縁ならむ枯草のすこし焦げてゐるのは

棒のごとくちなは落ちし水面よりゆっくりと畫のかなしみきたる

夕映ゆる花野にゆきて拂ふべし憑きたるものを草の實のごと

雲かかる遠山畑と人のいふさびしき額に花の種子播く

雪の日の杉の木伐れり項上にやさしき牢を作らむとして

岩押して出でたるわれか滿開の櫻のしたにしばらく眩む

崖の上にほんのしばらく繭のごと棲まはせてもらふと四方を拜めり

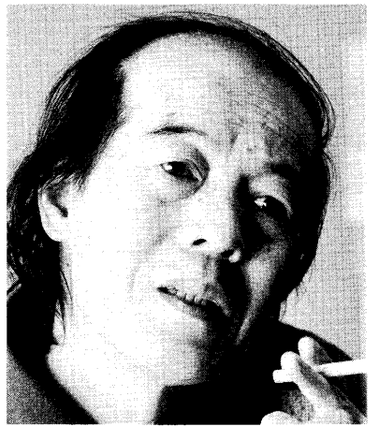
受賞のことば

前　登志夫

このたびはからずも、齋藤茂吉短歌文学賞をいただくことになりました。まことに忝ないことであります。齋藤茂吉の名を冠した賞ですから、身の引き緊まるのを覚えるしだいです。

これからは、茂吉短歌文学賞に恥じないように努力してまいりたく思います。とりわけ、明日の短歌をひらく眞に清新な正統とは何かということを、静かに素志をもって追求して行きたく念願いたしております。

おわりに、選者諸氏をはじめ、関係各位に御礼を申し上げます。



第４回齋藤茂吉短歌文学賞受賞者略歴

前　登志夫（まえ としお）

歌人。大正15年１月１日、大和吉野生まれ。同志社大学中退。はじめ現代詩を書き、かたわら柳田・折口の民俗学をまなぶ。

郷里の先人、前川佐美雄に親しみ、20代は多く各地を遍歴したが、昭和30年ころから故郷の吉野山中に定住し、作歌をはじめる。

その歌風は、豊潤な抒情と韻律によって、独自な詩的宇宙をもち、早くより「山靈の歌人」などと称されている。「自然の中に再び人間を樹てる」（詩集『宇宙驛』後記・昭和31年）という生涯の主題を掲げている。

『山繭の会』主宰。

歌集には、「子午線の繭」（白玉書房）、「靈異記」（同）、「縄文記」（同）第12回迢空賞受賞、「樹下集」（小澤書店）第３回詩歌文学館賞受賞等。

ほかに「吉野紀行」（角川書店）、歌論集「山河慟哭」（小澤書店）、「吉野日記」（角川書店）、「森の時間」（新潮社）ほか多数がある。

●選考委員による　選評

心の原郷からの歌

岡野弘彦

颱風の近づく朝明さびしらに菩薩の肉のふくらみはじむ

人戀ふることをつつまぬ世となれり藤葛たぐる娘の髪匂ふ

この山に登りきたりし石龜をいとしみをれば春の雪ふる

歌集『鳥獸蟲魚』は、前登志夫氏の第五歌集である。『子午線の繭』・『霊異記』・『縄文記』・『樹下集』と、従来の四歌集の中でも一貫して吉野にあって、吉野山中の生活や自然と、その生活の奥に伝承せられている日本人の魂のゆらぎとを歌いつづけてきたこの歌人は、現代にあって日本人の心の原郷を歌う新しさと重さとを、その作品の内に凝縮させている。

吉野という土地は、「よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よよき人よきみ」という天武期の呪歌にあるように、いや神武神話の中ですでに熊野とならんで、吉野はそこをおとずれる人に祝福の力を与える、神秘の地であった。だが、前氏の文学は、そういう古典的な力を、ただ懐古して歌っているのではない。

詩から出発し、一時はみずから都会を漂泊した前氏は、そののち自分の本據をこの吉野に据えて、現代の世相を見すえ、観念や思想の漂泊のさまを見とどけながら、日本人の心の原郷に住む者の情念を、短歌の様式のうちにくり返しくり返し、飽くなく表現しつづけている。

その歌は、「吉野よく見よ。よき人よきみ」というあの古歌のように、現代の混迷を苦しみ生きる者の心に、すがすがしい詩のよみがえりを感じさせる、しらべの深さと、予祝の力を秘めている。

今年度の齋藤茂吉短歌文学賞受賞にふさわしい歌集として推す理由である。

透明な山の気

川村二郎

吉野に住み続け吉野を歌い続けてきた前登志夫氏として、この新しい歌集は、内容的に格別新しいというべき所はないかもしれない。しかし素材や意匠の新奇な発明の有無とかかわりなく、吉野の山霊と交感しつつ霊の声をおのれの声と化して行く前氏の営みは、同じ風土をいよいよ深くうがち、うがった地の底からいよいよ透明な霊気を汲み上げている。その気の中では、生も死も一つに溶け合ってしまい、ゆらゆらと揺れながら存在の大いなる不思議を告知しているかのようである。

重厚な吉野の文学

島田修二

前登志夫の『鳥獸蟲魚』は吉野に定住する歌人の第五歌集であり、霊妙な自然の中で人間の生の意味を問いかける著者の円熟した詩魂の結晶とも言える、近年の短歌界の収穫と言うべきものである。この人の才質はすでに詩集『宇宙驛』（昭和三十一年）に紛れもないものがあったが、前川佐美雄氏に即き、短歌という三十一音の定型詩に触れて完全燃焼を果たし、第一歌集『子午線の繭』（昭和三十九年）以来、前人未踏の詩境を開き続けて来ている。

作歌のかたわらに綴るエッセイも多くの人びとを魅了し続け、近年では『森の時間』（平成三年）が高く評価されている。地域を異にするとはいえ、この歌人の存在は、みちのくの齋藤茂吉にも通じ合うものがあって、時代を同じくしていたならば、茂吉自信が稱揚したに相違ないものと思われる。第四回を迎えたこの賞が、前氏に贈られることによって、更に重厚なものとなり得たことを喜びとしたい。

自然自己一元の生

宮地伸一

吉野の山中に住む前登志夫という歌人については、実は私はよく知らなかったのだが、このたび、歌集『鳥獸蟲魚』を真剣に読んでみて、一種のカルチャーショックとも言うべき衝撃を覚えた。

絶え間なくわれを見張れる山脈よいま黄緑の靄をまとひて

ひめゆりに流るるさ霧文明より運ばれて來し汚物かわれは

今、仮りに二首をあげるが、常凡な日常の写実に生きて来た者には、いたく異様な表現の世界であった。しかし茂吉に結びつけて言えば、この歌人としての「実相観人」による「自然自己一元の生」が切実に表現されていると言っても差支えないと思ったのである。

うつくしい國原

安永蕗子

岩ひとつ押してゐたればなかぞらを花のふぶきは流れゆくなり

という一首、以前から好きな一首であった。うつくしい歌である。作者をとりまく吉野のすべてを、我が國原として敬してやまぬ人の至福の面ざしが見える一首である。そしてこの至福をおしたてて、作者は自然をこの上もなく大切に思うのである。うつくしい國原をうつくしいと歌うのが何よりも純な心であろう。今、文壇には、こうした純心が喪せつつある。純心の歓喜は次の一首に極まる。

こんなにも小さき花を咲かせゐる野の花群れてわれ立ち舞はむ

得がたい境地をもつ歌人であり、今年の賞のゆくえ、よき國原に到ったと思っている。

これまでの受賞者

第一回　岡井　隆『親和力』砂子屋書房

第二回　本林　勝夫『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』桜楓社

第三回　塚本　邦雄『黄金律』花曜社

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局
〒九九〇　山形市松波二丁目八―一　山形県生活福祉部生活文化課内
TEL　〇二三六―三〇―二一五八